

男性看護師に対する業務評価・役割期待に関する文献的考察

明野伸次*

抄録：本稿では男性看護師に対する業務評価・役割期待に関する文献を検討し、今後の研究課題と方向性を得ることを目的とした。

その結果、男性看護師に対する業務評価・役割期待は「看護師である男性」と「男性である看護師」との二面性の認識から行なわれていた。「看護師である男性」とは、特に女性患者に対する「羞恥心を伴うケア」は困難として、その業務評価と役割期待は低く、一方、力仕事や機械類に強い、また判断力があるといった、一般的な「男性的イメージ」から男性看護師に対して業務評価と役割期待をしている認識である。「男性である看護師」とは、性別に関係なく「専門職」として男性看護師に対して業務評価と役割期待をしている認識である。

以上から、今後の研究課題と方向性に関して、「男性である看護師」という認識からの業務評価と役割期待は、本来看護に求められる「専門性」に関して、十分に検討していく必要がある。また「看護師である男性」という認識からの業務評価と役割期待は、性の違いに関してジェンダーという一方の方向からのみ捉えるのではなく、「セクシュアリティ」という広い視点で考えていく必要があると示唆された。

キーワード：男性看護師、役割期待、セクシュアリティ

はじめに

男性看護師の看護職就業者全体に占める比率は約4%であり、10年前と比較して、わずか1%の増加である¹⁾。看護に携わる男性の増加は周知されたものになりつつあるが、未だ男性看護師は少数派にとどまっていると言える。ただし、少数派であることに変わりはないのだが、男性看護師を巡る状況は急激に変化しているといえは言い過ぎであろうか。近年における男性看護師の多様な領域への進出はますます広がりを示しつつある。男性看護師は歴史的に精神科病棟への偏った配置状況にあったが²⁾、一般科への就業、および男性看護師を配置している病院の比率が増加している。日本看護協会による病院看護基礎調査³⁾⁴⁾⁵⁾によると、男性看護師を配置している病院の比率は1987年の28.8%から1999年には58.9%と、わずか10年程の間に急激な上昇を示している。これが、特定機能病院に限定すると1999年には82.9%の配置である。また、配置部署別構成比では、精神科病棟への

配置が1991年には55.3%と半数以上であったが、1999年には44.1%になり、一般病棟が28.4%、手術室が12.3%と、精神科への偏在とは言い難い状況にある。一方、看護師養成学校への男性入学者の割合は1990年では1.0%であったのに対し2002年では6.3%と増加し⁶⁾、本校においては例年10~20%と驚くべき割合である。

このような変化は、看護サービスの受け手や、臨床で働く看護師、そして看護教育に様々な影響を与えていることは想像に難くない。それは、近年、看護雑誌等において男性看護師をテーマとした特集が組まれたり、男性看護師に焦点を当てた研究も散見されるようになってきたことからわかる。

そこで、本稿では男性看護師に関する研究において、多様な領域への進出に関連する「業務評価・役割期待」に焦点を絞って考察し、今後の看護研究の課題と方向性について示唆を得ることを目的とする。

文献検索方法

*看護学科 実践基礎看護学講座

医学中央雑誌の検索を1989年から2004年まで行った。

キーワードは「男性」と「看護」を組み合わせた。また、2002年に、看護婦（士）から看護師へ名称が改正されたため、従来、キーワードが「看護士」で登録のあった文献の一部が「看護師」と変更された。そこで、最新看護目録から「看護士」とキーワードがある文献を1989年から検索した。検索された文献の中から、泌尿器科男性患者への看護援助を検討したものなど論点の異なる文献は除外した。その結果、医学中央雑誌からは54件、最新看護目録からは51件の文献が検索された。(表1、2) なお、検索年数を1989年からとしたのは、「従来、男性と女性を区別していた教育内容については男女の区別をなくした」と保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則が1989年に改正されたことにより、男性看護師の研究に影響があると考えたからである。

次に、医学中央雑誌から得られた54件、最新看護目録から得られた51件の文献のうち、男性看護師に対する業務評価・役割期待に関する文献に絞って検討した。その結果、原文が入手可能だった17件を本稿の検討対象とした。

男性看護師を巡る社会情勢の変化

男性看護師の誕生は1800年代までさかのぼり、1860年代の戦争時において「看病人」と呼ばれる傭人や、1880年（明治12年）に設立された京都府癲狂院てんきょういんで患者の世話を当たっていた「救助人」と呼ばれた特別な教育を受けていない男性であった²⁾。その役割は、日常生活の世話や看病という目的ではなく、軍事における兵隊としての役割や、精神科医療において患者を押さえつけて手錠や足錠をかけることなど「力」が期待されていた。

その後、1915年（大正4年）の「看護婦規制」で男性看護師は【男子タル看護人ニ対シテハ本令ヲ準用ス】として女性看護師と同様、法的に位置づけられた。1947年（昭和22年）に制定された「保健婦助産婦看護婦法」では、「看護師規制」同様、【男子である看護人について

は、この法律中、看護婦または准看護婦に関する規程を準用する】としたものの、【男子である看護人については、国家試験科目のうち「産婦人科及び看護法」を除くものとする】とし産婦人科実習は精神科実習に読み替えられた。まだ記憶に新しい「看護士」という名称は、1968年（昭和43年）に「男子である看護人」から改正された。現在、「男子である看護人」と称されていた頃の男性看護師も含め、男性看護師の看護職就業者全体に占める比率は約4%、4万4千人である¹⁾。このように、男性看護師に物理的な「力」が期待された歴史的背景があり、産婦人科実習が精神科実習に読み替えられるといった教育的背景も相まって、男性看護師は精神科看護領域に偏在していた。

しかし、近年における男性看護師の多様な領域への進出は広がりを見せつつある。現在、男性看護師の約6割が、一般科や救命救急、手術室などの精神科以外に就業している。それは、全国において半数以上の病院が男性看護師を配置しており、特定機能病院に至っては82.9%の配置からも示唆される⁵⁾。教育制度に関しては、1989年（平成元年）に”従来、男性と女性を区別していた教育内容については、男女の区別を無くした”と男子看護学生に産婦人科実習が認められた。また、1993年（平成5年）には男性の保健士免許の取得が認められ、2002年（平成14年）に名称が男女区別無く「看護師」に統一された。このように、男女区別ない教育や、専門職業人として看護師を位置づける動きが、男性看護師の多様な領域への進出と関連しているかもしれない。

教育現場では、男子学生の募集を制限している学校は1987年には58.3%と半数以上であったのに対し、2001年には11.8%と大きく減少している⁷⁾。さらに、1994年の時点では看護大学数が30校であったが、2002年には98校と急激な増加をみせ⁸⁾、看護師養成学校への男性入学者の割合が1990年の1.0%から、2002年では6.3%に増加している⁶⁾。すなわち、受け入れの広がりが、そのまま男子看護学生の増加と結びついていると言えよう。本校においても、男子学生の占める割合は2002年18.0%、2003

表1 医学中央雑誌年次別研究論文数（キーワード：「男性」と「看護」）

	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	計
原著										1(1)	1	1	4(2)	3(2)	3	13(5)
会議録					1	1		3(2)	3(1)			1		3(1)	2(1)	14(5)
解説								1			1	1	2(1)	10		15(1)
一般							1	1	2		1		6			11
計					1	1	1	5(2)	5(1)	1(1)	3	3	12(3)	16(3)	5(1)	54(11)

表2 最新看護目録年次別研究論文数（キーワード：「看護士」）

	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	計
1	7	3	14(2)	5	6(2)	1	4(1)	2	4	2(1)	2					51(6)

* ()は本稿で検討した文献

年17.4%と高い比率である。これらは、高齢社会における医療・福祉職への志向や、男女雇用機会均等法の改正、また、第6次学習指導要領改定における「家庭科の男女必修化」などに代表されるジェンダーフリー教育などの、社会の動向が影響していると考えられる。

以上から、物理的な「力」が期待され、精神科看護領域へ偏在していた歴史的背景から、近年における、男女区別ない教育や、専門職業人として看護師を位置づける動き、および、ジェンダーフリー教育など、男性看護師を巡る社会情勢の変化は目まぐるしいと言える。

女性看護師から見た男性看護師の業務評価と役割期待

女性看護師から見た男性看護師に対する業務評価に関して、橋爪⁹⁾らは女性看護師（管理者を除く）を対象に、日本看護協会の看護分類表（34項目）にある看護業務から、男性看護師が遂行する看護業務の評価を行った。その結果、女性看護師の評価が高い業務は「診療・治療の介助」「呼吸循環の管理」といった診療・治療の補助業務であり、機械に強い・判断力に優れている等の男性的イメージを反映していると報告されている。また女性看護師の評価が低い業務は、「身体の清潔」、「食事の世話」、「排泄の世話」、「身の回りの世話」、「病室内、外の世界整備」といった直接看護業務である。これは男性看護師が看護業務を行う際に、患者が抱く羞恥心が高いことが影響していると述べられており、男性看護師との勤務経験の有無にかかわらず有意に評価が低いと報告されている。原田¹⁰⁾らも同様に、女性看護師を対象に、男性看護師が遂行する看護業務を評価している。その結果、評価している業務として「力仕事」、「ME機器の扱い」、評価していない業務として「女性のケア全般」、「女性の陰部ケア」があげられている。女性に対する羞恥心を伴うケアは患者側のストレスを考慮して、男性看護師が行うことに賛成しない傾向が見られたと報告している。

女性看護師から見た男性看護師に対する役割期待に関して、牧野¹¹⁾らは、女性看護師を対象に男性看護師の受け入れについて調査を行った。その結果、是非入って欲しい部門として「精神科」、「救命救急」、「リハビリテーション」、「手術室」、「整形外科」の順に期待が高かった。絶対に入って欲しくない部門では「婦人科」、「産科」であった。同様に、山崎¹²⁾らは、看護管理者（総婦長）を対象に、管理職に立場からみた男性看護師の受け入れについて調査を行った。是非入って欲しい部門として「救命救急」、「手術室」、「リハビリテーション」、「精神科」の順に期待が高く、絶対に入って欲しくない部門では「婦人科」、「産科」、「泌尿器科」と、ほぼ女性看護師の期待と一致していた。その中で、具体的に期待している内容として「力仕事」、「ME機器の扱い」が挙げら

れ、「女性患者の処置を行うのは問題がある」と報告されている。比較的最近の研究では、中平¹³⁾らは、女性看護師を対象に、直接看護業務26項目について、女性看護師・男性看護師どちらが行うのが望ましいと考えているか研究した。その結果、看護業務を「女性看護師型」（全身清拭、入浴介助）、「同性型」（導尿、陰部ケア、剃毛）、「無差別型」（服薬、注射など）、「男性看護師型」（車椅子介助、歩行介助）の4タイプに分け評価している。

「女性看護師型」に分類される看護業務は、男性看護師に援助されることに強い羞恥心があると考えられ、「同性型」は同性であっても強い羞恥心が伴い、同性の看護師が行うことが望ましい援助と述べられている。また、「男性看護師型」に関しては女性看護師が「力」を期待した結果であると述べられている。

一方で、瀧川¹⁴⁾らの、全国における大学病院の看護部長を対象に、男性看護師の所属部署の配置理由を調査した研究では、「最近の医療機器が多い部署だから」と、機械類の取り扱いがやや期待されているものの、「腕力・体力」は期待する要素となっていないとの報告もある。また、岡田¹⁵⁾らの、長崎県の病院の看護管理者を対象に、男性看護師の一般病棟への配属理由を調査した研究では、従来、期待されていた、体力があるとか医療機器に強い、という理由に関わらず、男女区別無く病棟に配属していると報告している。

以上の結果から、女性看護師から見た男性看護師に対する業務評価に関して、評価の高い業務は、機械に強い、判断力や力があるといった「男性的イメージ」が影響していた。また、評価の低い業務は、特に女性患者に対する「羞恥心を伴うケア」であった。

また、女性看護師から見た男性看護師に対する役割期待に関しても、業務評価と同様、力仕事、ME機器の取り扱いといった「男性的イメージ」に関係する役割期待が高かった。また、女性への「羞恥心を伴うケア」は困難であるとされ、その役割期待も低い。しかし、一方で、男性看護師の一般病棟への進出が示唆するように、男女区別無く病棟に配属し、男性看護師に対して特別な期待はないとの報告もある。

患者から見た男性看護師の進出に関する業務評価と役割期待

患者から見た男性看護師の進出に対する業務評価に関して、井出¹⁶⁾らは、男性看護師にケアを受けたことのある患者を対象に、ケアを受ける時の気持ちを調査した。その結果、男性、女性患者問わず、陰部洗浄や入浴介助など、いわゆる羞恥心の強い看護業務に関して評価は低く、特に女性患者は男性看護師に対しより強い傾向にあった。また、長谷川¹⁷⁾らは、精神科の患者を対象に、患者の男性看護師に対する認識を調査した。業務評価の観

点からは「入浴時恥ずかしい」といった意見が挙げられ、羞恥心の伴うケアは同性の看護師が良いとされた。また、直接の業務評価ではないが「病棟の雰囲気明るくなった」、「身だしなみが気になるようになった」といった、男性看護師の存在自体が刺激になっている結果もあった。

患者から見た男性看護師の進出に対する役割期待に関して、福島¹⁸⁾らは、精神科の患者を対象に、アンケート調査を行い、看護業務の適性を調査した。その結果、看護業務のなかで全身清拭や入浴介助など羞恥心の伴う援助は、同性の看護師を希望していた。また、京極¹⁹⁾らは、一般病棟の患者を対象に、男性看護師の増員に関する意識調査を行った。男性看護師の増員には賛成の意見が多く、「力仕事で頼りになる」といった期待が挙げられた。男性患者に限っては、「男同士であるだけで安心して何でも言える」との理由が多かった。

一方で、山本²⁰⁾らは、一般の女性に対し、男性の助産婦についての意識調査を行った。約6割は男性の助産婦業務に反対の意見であったが、約3割は「信頼できれば性別にこだわらない」、「他の職種にも男性がいる」といった賛成の意見も見られた。また、男子看護学生の母性実習における褥婦の意見ではあるが、「勉強してもらえれば、男性も女性もかまいません。頼りになるのなら、どちらでもかまわないと思います」とか「よく勉強していれば問題ない」といった性別による期待は無いとの報告もある²¹⁾。

以上の結果から、性別に関係なく「専門職」として男性看護師に役割期待している状況も少数ではあるが見受けられる。しかし、患者から見た男性看護師の進出に対して、力仕事などの「男性的イメージ」が関連した業務評価と役割期待は高く、「羞恥心を伴うケア」に関しての業務評価と役割期待は低いと言える。

男性看護師自身が認識する役割期待

男性看護師自身が認識する役割期待に関して、百田²²⁾らは、精神科以外に勤務する男性看護師を対象に、男性看護師に期待される役割に関して調査した。その結果、「役割に違いがあるか」の項目では、「違う役割」57.7%、「同じ役割」30.8%とそれぞれ認識していた。これが、看護師経験10年以上の群だと「違う役割」50.0%、「同じ役割」43.7%と、同じ役割とするものが有意に多かった。また、期待される役割で女性看護師と違う点については、「看護チームの活性化」、「男性的な看護の視点」、「力や体力」、「機器の取り扱い」、「男性患者の理解」、「小児看護における父性的な役割」が挙げられた。さらに、男性看護師に期待される役割をどのよう望むかの項目では「女性看護師と同じ役割を期待され

たい」が53.8%、「女性看護師と違う役割を期待されたい」が38.5%であった。

岡田¹⁵⁾らは、長崎県の男性看護師を対象に、男性看護師自身が一般病棟へ進出することについて賛成理由を調査した。その結果、「発想が女性看護師と異なる」が57.6%、「病棟の雰囲気が良くなる」が45.9%、「医療機器に強い」が43.5%、「体力がある」が38.8%と認識していた。

また、北林²³⁾²⁴⁾は、男性看護師自身が認識する特異性について研究した。その結果、「何でも屋としての役割期待」、「看護に対する社会の認識不足」、「たび重なる制約」、「存在価値の主張」、「男性性による優遇」の5つの認識が抽出された。役割期待という観点では「何でも屋としての役割期待」において、「機器類取り扱いの役割」、「物理的力を必要とする役割」などの男性看護師の認識が含まれた。

一方、研究以外の文献で、高橋²⁵⁾は、脳神経外科病棟での勤務体験において、周囲のスタッフの受け入れもあり「仕事の内容も、全くと言ってよいほど看護婦と同じ仕事をしています」や「基本的には同じ看護職だから、男とか女とかの次元でとらえてほしくない」と性別に関する役割の違いは無いと述べている。

以上の結果から、男女区別無く同じ看護職として自身の役割を自認している状況と、男性看護師自身も女性看護師や患者同様に「男性的イメージ」から役割期待を自認している状況とがある。

今後の研究課題と方向性

男性看護師に対する業務評価・役割期待には、女性看護師（看護管理者）、患者、そして男性看護師自身も、程度の差はあるものの「男性的イメージ」での認識と、「専門職」としての認識が影響していた。つまり、男性看護師に対して、男性看護師自身も含めて「看護師である男性」と「男性である看護師」との二面性の認識から業務評価・役割期待を行っていると考えられる。「看護師である男性」とは、特に女性患者に対する「羞恥心を伴うケア」は困難として、その業務評価と役割期待は低く、一方、力仕事や機械類に強い、また判断力があるといった、一般的な「男性的イメージ」から男性看護師に対して業務評価と役割期待をしている認識である。一方、「男性である看護師」とは、性別に関係なく「専門職」として男性看護師に対して業務評価と役割期待をしている認識である。

それでは、男性看護師、女性看護師に関わらず、一般的に看護に求められているものは何か考えていきたい。日本看護協会の看護をめぐる意識調査²⁶⁾における「看護婦への期待」の項目では、「病状の変化を的確に把握

し、医師に連絡してくれる」、「検査・処置・病状の不安などの訴えに耳を傾け、わかりやすく説明してくれる」、「注射や包帯交換などの処置を上手にやってくれる」が上位に挙げられている。また、金坂²⁷⁾らは、患者を対象に、看護サービスにおける期待度、満足度の調査を行った。その結果、「安全を守る」、「適切な接遇」が期待度の高い看護サービスであると報告されている。すなわち、本来看護に求められるものは、病状の把握、的確な説明、看護技術といった、まさに「専門性」であるといえよう。したがって、「男性である看護師」という認識に関しては、本来求められる「専門性」に関して、十分に検討されなければならないと考える。文献検討の結果からは、男性看護師に対する「専門性」に関する研究や調査はあまりにも少ないと言わざるを得ない。

また、男性看護師に対する業務評価・役割期待には「看護師である男性」という認識が影響していた。近年、この「看護師である男性」といった認識に関しては、ジェンダーの観点から議論されている^{28)~31)}。すなわち、ステレオタイプの男性イメージで男性看護師を捉えるのではなく、個人の能力・適正を重視するといった個性の尊重、言い換えればジェンダーフリーの認識が必要だといった内容である。こういった、ジェンダー問題の議論は、男女の差別的取り扱いや、男らしさや女らしさからくる心理的負担を解消し、仕事の公平さの確保を目指す。しかし、「看護師である男性」といった「性」の違いという現象から男性看護師に対する業務評価や役割期待を考える際に、このジェンダーという一方の視点からのみ考えるのではなく、「セクシュアリティ」という広い視点で考えていく必要があるのではないか。文献検討の結果から、「看護師である男性」に対する業務評価や役割期待において「性」が焦点となっていた現況は明白であるが、その「性」に関して、「セクシュアリティ」の観点が少ないと考える。セクシュアリティの定義は、性行為や性器を示すセックスという狭義の概念から、近年、保健医療の領域では、性的存在としての人間の全人格と全生涯を包括し生殖を伴わない性や、その人の考え方等も含めた人間全体として多く用いられている³²⁾。その、セクシュアリティに関して、朝倉³³⁾は、医療職者の中でも看護職者は、医療の対象となる人間に最も近接して関わりうる専門職であり、性を含めた人間を全体的に把握することが必要としながらも、看護職者が性という事柄を扱えるかは疑問であり、そのための系統的な研究も行われていないと指摘している。つまり、我々、看護職者が「性」を「セクシュアリティ」という広い視点で考えていくことは、人間としての基本的ニーズである「セクシュアリティ」に関して、その看護援助にどう生かしていくかという看護の本質にまで影響して

くと考えるのである。そのための糸口として、「看護師である男性」を「セクシュアリティ」の観点から捉える意義は十分にあるであろう。

以上から、男性看護師に対して「男性である看護師」と「看護師である男性」という認識から業務評価と役割期待が行われていることが明らかとなった。今後の研究課題と方向性に関しては、「男性である看護師」という認識からの業務評価と役割期待は、本来看護に求められる「専門性」に関して、十分に検討される必要がある。また、「看護師である男性」という認識からの業務評価と役割期待は、性の違いに関してジェンダーという一方の方向からのみ捉えるのではなく、「セクシュアリティ」という広い視点で考えていく必要があると示唆された。

文 献

- 1) 日本看護協会出版会：平成15年看護関係統計資料集. 12-13. 2003.
- 2) 寺山範子・塩野悦子：名称の変遷にみるわが国の男性看護者の歴史. 宮城大学看護学部紀要. 2. 1. 69-76. 1999.
- 3) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 1991年病院看護基礎調査. 41-42. 1993.
- 4) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 1995年病院看護基礎調査. 44. 1997.
- 5) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告 1999年病院看護基礎調査. 42. 2001.
- 6) 前掲72-84.
- 7) 新井真理子・井上令子・松崎綾子：男子学生の募集を制限している看護学校数の15年間の推移. 看護教育. 42. 2. 406-409. 2001.
- 8) 杉本みど里・舟島なをみ：看護教育学. 医学書院. 414. 2004.
- 9) 橋爪俊喜：看護師の看護業務遂行に対する評価と期待度. 日本看護学会論文集 第23回看護総合. 231-233. 1992.
- 10) 原田真澄・北池正・牧野尚子他：看護における男性の進出に関する研究(2)看護業務の適性について. 日本看護研究学会雑誌. 19. 4. 93. 1996.
- 11) 牧野尚子・北池正・安岡満里子他：看護における男性の進出に関する研究(3)看護婦の受け入れ体制について. 日本看護研究学会雑誌. 19. 4. 94. 1996.
- 12) 山崎典子・北池正・池田公子他：看護における男性の進出に関する研究(5)総婦長からみた看護師のイメージについて. 日本看護研究学会雑誌. 20. 4. 58. 1997.
- 13) 中平健太郎・奥宮暁子：男性看護師が行う看護業務

- 等に対する女性看護師の認識. 日本看護研究学会雑誌, 26, 3, 331, 2003.
- 14) 瀧川薫: 大学病院に勤務する看護師の職務意識と採用にあたっての管理的背景. 病院管理, 31, 4, 25-31, 1994.
- 15) 岡田純也 浦田秀子: 長崎県における看護師の現状. 長崎大学医学部保健学科紀要, 14, 2, 57-63, 2001.
- 16) 井出彩・池嶋未加代・濱田安岐子: 一般病棟における男性看護師のイメージに関する調査. 共済医報, 52-55, 2002.
- 17) 長谷川和代・齋藤亜紀・杉村尚子: 看護師導入に伴う女性患者の行動変容に関する研究. 日本精神科看護学会誌, 90-92, 1999.
- 18) 福島進・吉井麻紀: 看護師の役割を看護者の性差のちがいで考える 看護師に対する精神科患者の意識調査. 日本精神科看護学会誌, 275-277, 1994.
- 19) 京極由紀他: 病棟への看護師導入に対する一考察 患者意識調査を行って. 鈴鹿中央病院雑誌, 6, 45-46, 1996.
- 20) 山本智美・加納尚美: 男性が助産婦業務をすることに関する意識調査. 助産婦雑誌, 55, 8, 732-733, 2001.
- 21) 毛利千明他: 男子学生の母性看護学実習にかかわって. 看護教育, 42, 1, 30-33, 2001.
- 22) 百田武司他: 男性看護師のかかえる問題. 看護学雑誌, 62, 3, 280-283, 1998.
- 23) 北林司: 男性看護師が認識する男性であることの特異性. 看護学雑誌, 1028-1031, 2002.
- 24) 北林司: 男性看護師が臨床において認識する男性であることの特異性. 日本看護科学学会学術集会講演集22号, 289, 2002.
- 25) 高橋克則: 一般病棟に勤務して. 看護学雑誌, 56, 7, 606-608, 1992.
- 26) 日本看護協会調査研究室: 日本看護協会調査研究報告 1992年看護をめぐる意識調査, 30-32, 1993.
- 27) 金坂尚子・長岡朋子・中西裕子他: 「期待度」「満足度」調査結果からみた看護サービスの検討. 日本看護学会論文集 第33回看護管理, 284-286, 2003.
- 28) 生野繁子: 看護職にの性差別撤廃の必要性-男性看護職の現状と男子学生のアンケート結果を参考に-. 九州福祉大学紀要, 1, 1, 107-115, 1999.
- 29) 船橋恵子: 看護とジェンダー. 看護教育, 42/1, 14-17, 2001.
- 30) 矢原隆行: 男性看護職をめぐる課題と戦略. 看護学雑誌, 66/11, 1006-1011, 2002.
- 31) 山崎裕二: ジェンダーの視点から. 保健医療社会学論集, 13, 2, 19, 24, 2002.
- 32) 朝倉京子: セクシュアリティに対する看護者の知識/態度. 看護研究, 32, 6, 440-449, 1999.
- 33) 朝倉京子: 看護職者の「セクシュアリティに対する態度」に影響を与える要因. 看護研究, 36, 6, 509-516, 2003.